

六
花
8



俳句雑誌りつか
2017 (平成29年)
cover design Yuna Mizuno

五月雨のたうたうたたり浮御堂
蟻螻に遭うてその字を忘じけり
もう既に佐用の蛸は終へしとよ
梅雨出水耳元に聞うねりけり
岩陰に回り込みたる水馬
揚花火仰げる水のやうな顔
こがね虫似非俳人の胸飾る
鳥取県大栄町出身つつじが丘部屋大西瓜
水棲院金色夭折居士金魚
梅雨明の月青々と石にあり

享年五歳にて水死

しののめに摘みたる蓮の象鼻杯

谷口一献手伝う

蓮の葉の萎れて赤子包^{くる}まむか

大江戸へ妻は旅の途洗飯

のうぜんの隣の庭へばかり落つ

四阿に見知らぬ人と涼みをり

名を聞けば姫待宵となりのけり

名残蚊に与ふるわが血惜しまざる

涼しさや帽子奪ひてゆきし風

敗戦日祖母は麦酒を喇叭呑み

田菜畑のおはりし竹に干す蝮

雪嶺抄

螢籠

笹村 政子

鮎釣の流るる雲に竿打てり
山女焼く炭火くづるる音のして
をしみなく老鶯の鳴くひと日かな
翡翠の影を離るる迅さかな
目の前のひとつが鳴いて遠蛙
叱らるる子の顔みえず麦藁帽
おとうとのはや寝まりをり螢籠
わしづかみしたる別れの夏帽子
仮縫の針打たれある薄暑かな
梅の実を落とすに巫女の総出かな

雪卿集

麦は穂に

佐津のぼる

本棚の褪せし背文字に緑さす
特急の通過になびく麦は穂に
手を振れば船からも振り青岬
雨蛙遠くで鳴けば近くでも
磯波の小石ひきづる音涼し

暮の春

藤生不二男

ゆるやかに沈みゆくもの暮の春
ひとところ冷えてきたりし桜かな
まだ海の見ゆる高みに初つばめ
その沖の遠流の島や山ざくら
隠り沼の桜葉降る岸辺かな

雪卿集

初 夏 出 口 誠

短めの飛行機雲よ大夕焼
たわいなき会話のはずむ初夏の午後
気だるさの絶頂なりき初夏の午後
ふうわりと風もないのに初夏の蝶
飛行機のゆつくりおりる初夏の朝

夏 燕 永田万年青

夏つばめ鳴き寄る子から餌を与ふ
夏つばめ黒から白にひるがへり
対向車するりとかはす夏つばめ
母の日や贈りし眼鏡今もあり
水馬底には写る脚の影

雪卿集

柳 鮠

升田ヤス子

雪彦山の沢にさ走る柳鮠
父の手の網より外す花うぐひ
吊橋やきらりきらりと上り鮠
翡翠の碧き軌跡のありしのみ
渡船屋の小窓閉められ走り梅雨

うららか

志方章子

庭に出て桜の開花宣言す
走り根の鷺掴みせる春の土
うららかや潮入川の揺らぎみて
囀りに耳鳴り消えてあたりけり
桜つてピンクじゃないのと子に聞かる

母の日や贈りし眼鏡今もあり 永田万年青

夏つばめ鳴き寄る子から餌を与ふ

夏つばめ黒から白にひるがへり

対向車するりとかはす夏つばめ

母の日や贈りし眼鏡今もあり

水馬底には写る脚の影

ははのひやおくりしめがねいまもあり ながたおもと

生前母の日に贈った眼鏡が今も身近に置いてある。普段は何気なく置いてあるが、母の日の今日、その眼鏡を強く意識した。「ああ、あの時母にプレゼントしたのだった。はにかみながら喜んでくれた母の言葉や笑顔が鮮明によみがえる」。あれから数十年、今は母の眼鏡より強い度数のものを使うような年齢になった。今更ながら母よりも年上になっている驚きと思いついて浸っているのである。「今もあり」に母への思慕がずっと続いているのを重ねた。母の日の母親回顧のしみじみとしたよろしさ。

ゆるやかに沈みゆくもの暮の春 藤生不二男

ゆるやかにしずみゆくものくれのはる ふじおふじお

ゆるやかに沈みゆくもの暮の春
ひとところ冷えてきたりし桜かな
まだ海の見ゆる高みに初つばめ
その沖の遠流の島や山ざくら
隠り沼の桜葉降る岸辺かな

不二男の目指す句境はここなのか。晩春の気配に満ちた水に沈みゆくものを見て「ゆるやかに」というのは作者のゆとりの気持を反映している心象であろう。去來や健吉、龍太のいうように「暮の春は春の終わりのころであるが、暮春の意味に語感として夕方の気分を含ませ」ているはず。

一読想起したのは夕日が水に差し込み、浮遊する物がゆっくり沈んで行く場面。日中には何事もなく浮遊して見えなかった物が夕方水温が下がって沈下して行くのが見えた。物憂う春の夕暮の気持も重ねたと思われる。不二男はこういう処に心を置けるのである。

雪樹集

砂利小路

溝渕 弘志

涼やかな音響かせて砂利小路
夏の雲海と溶け合ふ場所のあり
鳩を追ふ子供の真顔夏近し
帆船の舳先に立ちて春惜しむ
北狐あくび一回春の昼

松の芯

住田千代子

枝先に名残りの花の透けにけり
桜葉ただひたすらに降りにけり
すくすくと育ちをりけり松の芯
薬ひとつ残し牡丹散りにけり
串抜けば笑ひをりけり鮎の顔

雪樹集

下
闇

田尻
勝子

亀三匹捨てる企てひつじ草
下闇の大樹に恋をしてしまふ
池守がバルブを開けし春の水
楠若葉滴る中に我のをり
父と師の川は球磨川鮎の影

夏
燕

延川五十昭

大空に樹齡千年権の花
夏燕山田錦の上を飛ぶ
半兵衛の墓に迷へる夏燕
万緑や紅一点の大鳥居
万緑の中に鎮まる大文字

雪樹集

春
雷
廣畑
育子

古家に抜ん出てゐし桐の花
黒々と蝌蚪の押し合ふ池の縁
日の差して深くきざまれ蜷の道
逃げやうぞダム湖に光る春の雷
石楠花の急な坂道尼の墓

首
菴
赤松有馬守破天龍正義

夏燕飛んで路地裏光有り
自動ドア潜つて出たる夏燕
しま泥鱸啞へ立ちたる春の鷺
母の日や時折り想ふ父の事
首菴のほよるほよりん揺れてをり

雪樹集

一寸だけ
谷口
一献

口癖となりし冷や酒一寸だけ
叙勲欄丹念に見て夏は来ぬ
蒼天に光る幟とらんどせる
記念日の席に小鮎と酒肴あり
目で追ひて算盤弾く錦鯉



蛩雪譚

六甲選

二十九年六月号鑑賞と随想

苜蓿のほよほよりん揺れてをり

赤松有馬守破天龍正義

困ったことだ、主宰が時折オノマトベや擬音を使うから弟子もこのような訳の分からない句を作る。今はそのようなことよりもしつかり写生をしてそれに主観をふくませた味のある句を詠むように努めなければいけない。苜蓿とはシロツメグサといって、クローバーの乾燥した花をクッション材（つめもの）として輸出入のワインやスコッチ、マイセン、ウエツジウッド、チャイナなど割れ物に使った。句はその花が風に揺れて居る場面。「ああ、私もあのようなしろつめぐさのような人生だなあ」と自らを重ねているのだろうか。人生は百代（はくたい）の過客（かかく）だ、李白「春夜宴桃李園序」を参考にして芭蕉は言った。我々もばらばらせんと延川五十昭翁の中国詩講座を受けようぞ。ワンコイン句会での中国研究会の講座を開こうか。この間電話で「犬を連れていける句会があるのですか?」と問い合わせがあった。

ワンコ、INN?

六花集



栗月到着順

善野 焔

柳色にあらたまりたるお塚かな
花菲のせせらぎの辺に楚々となり
午後の花のぼせしやうにあかるみぬ
樟若葉一揺れ二羽の鳥を出す
新緑の揉み合うてゐる風の午後

江見 巖

青芝や殿様気分の屋形船
たかなや生臭坊主の匂ひせり
八十八夜現れいでし陰陽師
雨蛙柳の下雨宿り
母の日や補聴器眼鏡なき卒寿